

平成23年5月24日現在

機関番号：12701
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20500516
 研究課題名(和文) 中1ギャップの克服をめざして
 —男女必修ダンスの指導法開発を推進する小中連携—
 研究課題名(英文) Filling the Gap between Elementary to Junior High School in Transition
 —Development of Teaching Method of Required Subject of Coeducational
 Dance through Cooperation—
 研究代表者 高橋 和子 (KAZUKO TAKAHASHI)
 横浜国立大学・教育人間科学部・教授
 研究者番号：10114000

研究成果の概要(和文)：気軽に踊れるダンス教材を小中学生に実施し、初心ダンス指導者にとって最低限身に付けておくべきダンス技能や教授技術の精選を行った。それを踏まえ、指導のポイントを示した映像教材を作成し、それを映像共有が可能な双方向の教師支援ツールとして構築した。また、小中の接続を重視したダンス指導法により、授業が自己表現できる居場所になり自己肯定感が向上したことにより、「中1ギャップ」の解決策としての期待が持たれた。

研究成果の概要(英文)：In order to select the necessary dance technique and teaching method for inexperienced dance teacher, an easily accessible dance text was implemented on elementary school students. Based on the result of this research, visual text with teaching points was created as an interactive supporting tool for teachers. In addition, the teaching method which emphasizes the connection between elementary and junior high school increased the self-affirmation of students by offering them the place for self expression. This teaching method for dance education can be expected as a solution for filling the gap between elementary school and junior high school in transition.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：舞踊教育学、

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学

キーワード：中1ギャップ、中学ダンス必修化、指導法開発、ダンス技能、教材の映像化

1. 研究開始当初の背景

(1) 2007年中央教育審議会において、中学校1、2年男女のダンス必修化案が出された。戦後初めてである為、教育現場に不安が生じている。ダンス教材開発は男女共修の導入も含め、熟練教師による実証的研究も行われてはきたが、ダンス実施率は低く、

初心指導者向けの教材開発が必須である。
 (2) また、中教審は小中高の接続を重視した系統的な学びの連続性を掲げており、カリキュラム整備も課題になっている。その背景の一つには中学校1年生の不登校の増加があり、通称「中1ギャップ」の克服も重要課題である。しかし、小中の接続を重

視した指導法が「中1ギャップ」の解決策としてどのような効果をもたらすのかを検証した研究もあまりみられない。本研究が兼務する横浜国立大学附属鎌倉小学校では、5年間にわたり小中連携を進め、2007年には小中合同研究発表会を開催し、9年間のカリキュラム作成と具体的な取組(学びの構造化・連続性の整理と具体化、ねらいの共有、教材の精選、合同授業、乗り入れ授業等)が検証されつつある。

2. 研究の目的

気軽に踊れる表現・ダンス教材(以下、「ダンス教材」と略す)を小中学生に実施し、初心ダンス指導者にとって最低限身に付けておくべきダンス技能や教授技術の精選を行うこと。並びに、小中の接続を重視したダンス指導法が、「中1ギャップ」の解決策としてどのような効果をもたらすのかを検証することを目的とする。なお、本研究では、ダンス領域(創作ダンス・フォークダンス・現代的なリズムのダンス)の中でも指導が難しいとされる創作ダンスを主な対象とする。

3. 研究の方法

- (1) 気軽に踊れるダンス教材を先行研究や諸外国の研究結果から収集する。
- (2) 男女必修ダンスに効果的な指導方略を特定し、プログラムを小中学生に実施する。
- (3) 実践を踏まえ指導の留意点や技能を明確にしたダンスの映像教材を作成する。
- (4) 小中の接続ギャップを軽減する方策をダンス実践の意識調査を通して行う。
- (5) 著名なスポーツ選手やダンサーに、自身の小・中学校時代のことや中1ギャップを克服する術などの聞き取り調査をする。

4. 研究成果

研究目的を達成するにあたり、研究成果を年度別と全体的視点から見ていく。

(1) ダンス典型教材の有効性：20年度

先行研究で明らかにしてきた気軽に踊れる「ダンス」教材に関する知見に基づき、横浜国立大学附属鎌倉小学校6年生と附属鎌倉中学1年生の男女に本研究が授業実践を行った。その結果、受講者の意識調査などから典型教材の有効性が実証された。特に、新学習指導要領で提示されているダンスの技能を明確に押さえた指導のあり方について、具体的な「ダンス指導方略モデル」の作成ができた。さらに、ダンス実践を積極的に行っている北九州市立花尾小学校・花尾中学校において、「ダンス指導方略モデル」に基づき実践した結果、初心ダンス指導者であっても、ダンス技能を押さえた指導の可能性が推察された(研究協力者：甲斐富美子・園山

浩・山下直也 2009、後掲の雑誌論文 24,25)。

(2) 自己肯定意識の向上：22年度

ダンス授業実践追試を、新潟市立大通小学校・浜浦小学校、白南中学校、東京都中央区立港中学校、横浜国立大学附属鎌倉小学校で行った結果、ダンス初体験の小学生や中学生にとって、提示したダンス教材は十分典型教材として成立すること。指導を困難にしている「恥ずかしさ」を感じることもなく、全身をゲーム的感觉で動かすうちに自己表現が楽しくなり、自己肯定の度合いも上がることが分かった(研究協力者：赤坂桂2010、後掲の雑誌論文10,13)。

(3) 中1ギャップ克服の視点：20～22年度

小・中での授業観察を通して、児童・生徒が自己表現を豊かにしていることや、他者とのコミュニケーション能力が培われている様子が伺えると共に、肯定的な意識の変容が見られた。このことにより、中1ギャップの問題として挙げられている「自分の居場所がない」「自己表現ができてにくい」「他者に認められている感覚が少ない」(荻原建次郎 2007)などの課題に対して、ダンス実践の有効性が示唆されたと考えられる。さらに、教師の意識調査から、中1ギャップを克服する重要な視点として次のことがあげられた。

- ①何を表現してもけなされない安心する場
- ②授業内容の明確化
- ③小中学校の乗り入れ授業
- ④授業システム検討：管理教育からの脱却

(4) 初心指導者が取り組みやすい指導法開発 —教材の映像化：21～22年度

20年度に精選されたダンス教材を、横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小・中学校、川崎市立大東東小学校・霞ヶ関中学校、東京都杉並区立松の木中学校、中央区立港中学校、酒田市立飛鳥中学校などのダンス初心指導者が実践した。また、教員研修の場(独立法人教員研修センター西部地区研修会、山形市、新潟市、千葉県、東京都、神奈川県、長野県、大阪府、高知市、広島市、鳥取県、北九州市、鹿児島市)において本研究が提示し、教材の有効性や児童・生徒や指導者のつまづき等の課題を明らかにした。特にダンスが体育の他領域と異なり、指導困難な点を、意識調査から見た結果が次の通りである。

- ①児童・生徒・指導者の経験が少ない。
- ②指導内容・方法、評価がわからない。
- ③運動会や体育祭でのマスゲームやリズム

ムダンス等の実践のみで、授業実践ができていない状況があり、それでよしとしている現状がある。

- ④小学校高学年や中学生は恥ずかしがって動かない子どもがいる。
- ⑤小中連携を企図したカリキュラム作成や教材選択の意識が乏しい。

これらの課題を克服するための映像教材作成の視点は次のように考えられる。

- ①指導内容や方法、評価の明確な提示
- ②身につけるべきダンス技能の明示
- ③全身を解放して踊れる教材の開発
- ④小中の発達を抑えた教材選択

これらを踏まえ教材テキストを作成した(後掲:雑誌論文 8. 12. 16. 17. 20. 22, 23)。

それに基づき映像の教材化を行った。具体的には、ダンス技能や知識や指導の留意点が「指導のポイント」として視覚化されるように試みた。映像は研究協力者の北代暁也氏(横国大院生)が構築したポータルサイト「教師の ODORIBA」で視聴可能になった。

URL:<http://kyoushi-odoriba.seesaa.net/>
このサイトは、映像共有が可能な双方向の教師の新しい支援ツールとして、今後のダンス授業の有効な支援策になる点で意義が認められる。さらに、本研究の成果は『新ダンス授業講座』(DVD・CD・テキスト:後掲の図書1)として発刊され、今後のダンス指導実践の支援になると考えている。



(5) 諸外国の研究資料収集：21～22年度

ドイツからイェンツ・ヨハンセン氏(ダンサー・動きの教師・セラピスト)を2009年、2010年招聘し、教員や教員養成課程所属の学生に受講させた。彼が提供する実習は、身体についての詳細な知識の提供と、心を解放していくアプローチであり、表現的な動きやダンス的な動きへの有効な資料収集ができた。

また、南村千里氏(イギリス在住の振付家)にイギリスのダンス教育の聞き取り調査を行った。男女共修のダンス授業は活発であるし、自己表現することが好きな子どもも多い。それは、小中のダンスカリキュラムがナショナルスタンダードとして明示されており、専門の教師が授業することも、ダンスが盛んである一因であると考えられる。

これらのことより、中1ギャップを克服するための小中連携に向けてのダンス教材選択や指導法開発の必要性が課題となった。

(6) 著名人が身体活動に夢中になった訳

著名人(下記に明示)へのインタビューには本研究者があたった。インタビューの主な内容は「小中学校時代に夢中になった運動種目」「指導者との出会い」「子ども達に臨むこと」である(後掲:雑誌論文2.5.27.29)。対象者の共通点は以下の通りであった。

- ①海外でも活躍していることもあり、日本文化や風土に裏打ちされた精神性を大事にしていること。
- ②幼少の時からからだを動かすことが好きであったこと。
- ③いい指導者に出会ったことにより運動を精一杯、好きなようにできたこと。
- ④幼少時に海外において日本語ができない、あるいは、海外に行ってその土地の言葉が出来なくとも、身体活動(ノンバーバルコミュニケーション)で、外国の人たちと通じ合えることができたこと。
- ⑤夢中に取り組むことがあればそのことが自信につながり、中一ギャップに悩むことは少なくなると考えていること。

- 奥寺康彦(日本人初プロサッカー選手)
- 高橋大輔(フィギュアスケート選手)
- 中尾和子(厚生労働省健康大使)
- 近藤良平(朝ドラてっぺんダンス振付家)
- HANA(キッズパフォーマンスアート育成協会理事)
- 大野慶人(舞踏家)

(7) 成果のインパクト：本研究の普遍化

- ①ダンス教材の映像化(インターネットで動画配信)は初心ダンス指導者にとって

も、教材のイメージが掴みやすく、指導実践に繋がりやすい。

- ② 3年継続で行ってきた本研究は、文部科学省が作成している中学校保健体育科における「ダンス」リーフレット（全国の中学校保健体育教員に配布される、本研究者は作成の主査：2011年発行）のアイディアにも活かされており、ダンス初心指導教員にとっても、基礎・基本を押さえた指導実践が可能になる。
- ③ 言語的かつ非言語的なコミュニケーションツールにより、自己表現ができれば、自分の居場所や他者理解が生まれやすくなり中一ギャップの減少に寄与できる。

(8) 今後の展望

中学校1・2年のダンス必修の完全実施は平成24年である。初心ダンス指導者が授業実践（創作ダンス・現代的なリズムのダンス・フォークダンス）を行うことを期待する。そのためには、小学校でどのようなダンス実践をしてきたかを知ることは必須である。そして、中学校でのダンス経験が高校でのダンス選択に繋がるように、小中校の連携が重要になる。また、中1ギャップがなぜ起こるかの原因は様々であるものの、大きな要因の一つに、中学校での教科担任制というシステムがある。小学校に比べ自己受容されている感覚が少なく、自己表現しにくい現状が今回の研究で浮き彫りになった。東京都三鷹市は全市を挙げて小中連携を推進しており、中1ギャップも少ないという。自己表現できる場としてのダンス授業に期待がかかっている。

今後は、初心ダンス指導者にとって、単元の「はじめ—なか—おわり」の指導やダンス領域の違いによるモデル指導のパッケージ化を図り、誰でも簡単に指導できるように指導法開発を行っていきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、分担者、連携研究者に下線）

〔雑誌論文〕（計31件）

1. 高橋和子・大野慶人(2011)大野一雄・慶人の舞踏人生. 女子体育. 第53巻4/5. pp6-11
2. 高橋和子(2011)大野一雄のダンス教育に関する一考察—捜真女学校時代の指導経緯を中心として—(社)日本女子体育連盟学術研究. 第27号. pp1-16. 査読有り(投稿中)
3. 寺山由美・高橋和子他(2011)元気な子供と女性のライフステージを保障する運動プログラムの開発：中学2年女子の体力向上を視野において. ミズノスポーツ振興財団スポーツ学等研究助成報告書. pp1-8
4. 高橋和子 (2011)わかりあうべき存在としての

- 他者. 女子体育. 第53巻第2号. pp4-5
5. 高橋和子・中尾和子(2011)身体は使ったように変化する. 女子体育. 第53巻1号. pp6-9
6. 高橋和子(2011)体づくり運動の生活習慣化問題をたどす. 体育科教育. 第59巻1号. p9
7. 高橋和子(2010)からだの主人公になるために. 女子体育. 第52巻第12号. pp34-39
8. 高橋和子(2010)中1ギャップを乗り越えるコミュニケーションワーク. 舞踊教育学研究. 第12号. pp74-75
9. 寺山由美・高橋和子(2010)中学校・高等学校におけるダンスの実施状況. 舞踊教育学研究. 第12号. pp60-61
10. 七澤朱音・赤坂桂他(2010)新学習指導要領に対応したこれからの表現運動・ダンス学習. 女子体育. 第52巻第11号. pp40-45
11. 高橋和子(2010)新しい挑戦に向かって. 女子体育. 第52巻10号. pp15-16, 27-29
12. 高橋和子(2010)身体の可能性. 女子体育. 第52巻第5号. pp48-51
13. 赤坂桂(2010)「表現」の授業にチャレンジャー. 女子体育. 第52巻第4号. pp14-17
14. 加納菊枝・猪鼻純子・高橋和子他(2010)「わくわくどきどき 表現するっておもしろい」pp30-35. 「かかわり合い認め合う 踊るからだひらく心」pp36-41. 女子体育. 第52巻第3号
15. 寺山由美・高橋和子(2010)身体の感性を磨く. 女子体育. 第52巻2号. pp48-51
16. 高橋和子(2009)ダンス授業の基礎・基本から応用まで. 女子体育. 第51巻第12号. pp38-43
17. 高橋和子(2009)新学習指導要領に対応した表現運動・ダンスの具体化に向けて. 女子体育. 第51巻第12号. pp12-19
18. 高橋和子(2009)身体表現の世界が広がる. 舞踊教育学研究. 第11号. pp1-10
19. 高橋和子(2009)ダンスパフォーマンスが高校生の心身に及ぼす影響. 舞踊教育学研究. 第11号. pp28-29
20. 高橋和子(2009)新学習指導要領の概要とダンス必修化に向けて “中学校ダンス領域” “中学校ダンス領域”. 舞踊教育学研究. 第11号. pp50-52, 56
21. 斎藤昌子・高橋和子(2009)学校における体ほぐしの運動に関する研究. 舞踊教育学研究. 第11号. pp32-33
22. 村田芳子・高橋和子(2009)「新学習指導要領に対応した表現運動・ダンスの授業」 「内容と指導のポイント」女子体育. 第51巻第7/8号. pp6-7, 10-15
23. 高橋和子(2009)「ポーズ遊びから“群像”へ」「新聞になって」. 女子体育. 第51巻第7/8号. pp26-27, 54-55
24. 甲斐富美子(2009)現代的なリズムのダンスから創作ダンスへ. 女子体育. 第51巻第7/8号. pp96-99

25. 高橋和子・山下直也・甲斐富美子・園山 浩(2009)「心と体のスイッチオン」「新しい自分に出会う喜び」女子体育. 第 51 巻第 3 号. pp32-43
26. 高橋和子(2009)日溜まりの場としての体ほぐし. 体育科教育. 第 57 巻第 5. pp44-47
27. 高橋和子・高橋大輔(2009)翼を持ってそしていま銀盤を華麗に舞う. 女子体育. 第 51 巻第 1 号. pp6-9
28. 中村久子・高橋和子(2009)徳島県の伝統文化「阿波踊り」の教材化に向けた基礎的研究. (社)日本女子体育連盟学術研究. 第 25 号. pp 1 -12. 査読有り
29. 高橋和子・奥寺康彦(2008)チームプレイ、それは互いに可能性を引き出すこと. 女子体育. 第 50 巻第 9 号. pp6-9
30. 高橋和子(2008)表現の入り口. 女子体育. 第 50 巻第 7/8 号. pp50-53
31. 高橋和子(2008)「見る」ことと、「見える」こと. 女子体育. 第 50 巻第 6 号. pp4-5

〔学会発表〕(計 13 件)

1. 北代暁也. 高橋和子(2011)ダンスと体ほぐし運動の教師支援ツールの開発. 第 54 回未来世代の研究発表会. 日本女子体育連盟
2. 高橋和子(2010)舞踊領域から見た体操領域への提案(招待). 第 10 回日本体操学会記念シンポジウム
3. 高橋和子(2010)大野一雄のダンス教育に関する一考察. 第 30 回全国創作舞踊研究発表会
4. 北代暁也. 高橋和子(2010)ダンスと体ほぐし運動の教師支援ツールの開発. 第 30 回全国創作舞踊研究発表会
5. 高橋和子(2010)からだ気づき実習が心身に与える影響に関する一考察. 第 61 回日本体育学会
6. 高橋和子(2010)神奈川の体育学習の充実に向けて(招待). 神奈川県学校体育連合会
7. 高橋和子(2009)中 1 ギャップを乗り越えるコミュニケーションワーク. 第 29 回全国創作舞踊研究発表会
8. 寺山由美・高橋和子(2009)中学校・高等学校におけるダンスの実施状況～各県のリーダー教員を対象に. 第 29 回全国創作舞踊研究発表会
9. 熊谷佳代・高橋和子(2009)教師教育において表現運動・ダンス領域は何を学ばせるか. 第 29 回全国創作舞踊研究発表会
10. 高橋和子(2009)新学習指導要領改訂の概要とダンス必修化(招待). 千葉県高等学校体育研究
11. 高橋和子(2008)ダンスパフォーマンスが

- 高校生の心身に及ぼす影響について. 第 28 回全国創作舞踊研究発表会
12. 高橋和子(2008)若者の身体観に関する一考察. 第 59 回日本体育学会
 13. 高橋和子(2008)なぜリクリエイト歩行文化か. 人体科学学会シンポジウム

〔図書〕(計 4 件)

1. 村田芳子総監修・高橋和子・細川江利子・寺山由美監修・指導(2010)新ダンス授業講座:ダンス必修化に対応した授業展開. ユニバース
2. 杉山重利・高橋健夫・園山和夫編・高橋和子(2009)ダンス. 教師を目指す学生必携保健体育科教育法. 大修館書店. pp118-121, 159(総頁 322)
3. 今関豊一・品田龍吉編. 高橋和子(2008)ダンス. 中学校新学習指導要領の展開 保健体育科編. 明治図書. pp138-140(総頁 200)
4. 今関豊一・岡出美則・友添秀則編・高橋和子(2008)ダンス. 中学校教育課程講座保健体育科. ぎょうせい. pp109-116(総頁 262)

〔その他〕ホームページ等

サイト名「教師のODORIBA」
URL:<http://kyoushi-odoriba.seesaa.net>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 和子 (KAZUKO TAKAHASHI)
横浜国立大学・教育人間科学部・教授
研究者番号: 10114000

(2) 研究分担者 無 () 研究者番号:

(3) 連携研究者 無 () 研究者番号:

(4) 研究協力者

北代 暁也(横浜国立大学院生)
赤坂 桂(横国大学附属鎌倉小学校教諭)
末岡 洋一(横国大学附属横浜中学校教諭)
山下 直也(北九州市立花尾小学校教諭)
園山 浩・甲斐 富美子
(北九州市立花尾中学校)
加納 菊枝(川越市立大東東小学校教諭)
猪鼻 純子(川越市立霞ヶ関中学校教諭)
本間 寿美(新潟市立浜浦小学校教諭)
小島 かおり(新潟市立白南中学校教諭)
斉藤 昌子(横須賀市立武山中学校教諭)
寺山 由美(筑波大学講師)